

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

# 「ような」と「ように」の交替：名詞句「N1のよ うなXなN2」における

著者	光信 仁美
雑誌名	研究論集
巻	97
ページ	267-284
発行年	2013-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1443/00006094/">http://id.nii.ac.jp/1443/00006094/</a>

## 「ような」と「ように」の交替 — 名詞句「N1のようなXなN2」における —

光 信 仁 美

### 要 旨

助動詞「ようだ」の連体形「ような」と連用形「ように」は、「N1のような/ようにXなN2」(Nは名詞)という名詞句の中で交替が可能な場合がある。それは「ような」と「ように」の用法のうち「比況」と「例示」の場合である。交替がおこる場合の「Xな」の機能はそれぞれ異なる。「比況」の場合、「Xな」はN1とN2の共通属性を表し、形容詞によって典型的に表される。「例示」の場合、「Xな」はN2の内容を明示する機能をはたし、形容詞だけではなく動詞述語句によっても表される。それぞれの用法において交替を可能ならしめるのは、「ような」「ように」の連体修飾・連用修飾の機能からの解放である。

キーワード: 「ような」と「ように」の交替、連体修飾、連用修飾、比況、例示

### 0. はじめに

具体的な例からはじめよう。

(A) 波が 白い泡を たてて 押しよせる。

(B) 波が 白く 泡を たてて 押しよせる。

(A) では連体成分「白い」が、(B) では連用成分「白く」が用いられているが、二つの文が表す意味は全体として同じである<sup>1</sup>。奥津(2007)では、このような事態、すなわち、文中の成分において連体と連用の機能のちがいがあってもかかわらず、それが文の意味に差異をもたらさないような事態について、その成立条件を考察している。

同様の現象が、「ような」と「ように」を用いた名詞句においてもおこりうる。

たとえば、名詞句「お城のような大きい家」と「お城のように大きい家」のそれぞれにおいて、「お城のような」は「家」を連体修飾し、「お城のように」は「大きい」を連用修飾し、「ような」と「ように」のそれぞれを伴う修飾句は文法的に異なるはたらきをしている。しかし、これらの二つの名詞句全体が表す意味内容は同じである。(ただし、意味の違いが無視できるのは「お城のような大きい家」の「お城のような」が、家の大きさの比喩として解釈される場合におい

てであり、家の形状の比喩として解釈した場合は、「お城のように大きい家」と意味内容が異なる。）

つまり「N1のようなN2」（Nは名詞）のN2が、さらに連体修飾をうけて用いられるとき、「ような」を「ように」におきかえても、名詞句全体が指し示すことがらに違いがない場合がおこるのである。

本稿ではこのような現象を「ような」と「ように」の交替とよび、その可能性の条件を考察する。

### 0.1 「N1のようなN2」の四つの用法

ところで、名詞句「N1のようなN2」には次のように、比況、推定、例示、一致の四つの用法が区別される<sup>2</sup>。

①比況（N1に似ているN2）

○「……道理でどうやら民さんは野菊のような人だ」（野菊の墓）

②推定（N1であると推定されるN2）

○藤原は、寝不足のような顔をしていた。（太郎物語）

③例示（N1を例とするN2）

○「俺は、君たちのような秀才ではないし、…前途が多難だよ。…」（冬の旅）

④一致（N1で指示する内容と一致するN2）

○すると周二の頭脳には、次のような考えが抜きさしならず立ち昇ってきた。（楡家）

森山(1995)では「比況」「推定(森山では「推量」とあるが)」「例示」を次のように規定している。すなわち、「比況」の用法とは「N1のようなN2」においてN1とN2の関係が「不一致関係」である場合をいう。また、「不明関係」である場合を「推定(推量)」の用法という。「例示」の用法とはN1とN2の関係が「包含関係」(意味的にN2が上位概念を表していてN1を含む)にある場合をいう。

なお、「一致」の用法は、川口(1984)が指摘するように、N1に用いられる名詞が「次」「以上」「下」のような、文脈上のものごとを指示する名詞に限られており、またその指示対象がN2であることから、「例示」(包含関係 $N1 \subseteq N2$ )の用法の特殊なケース( $N1 = N2$ )であると考えられる。

したがって、「一致」は「例示」の下位用法であると考えられ、実質的には、「比況」「推定」「例示」の三用法が区別されることになる。

### 0.2 「ような」と「ように」の交替がおこりうる用法

ひとまず先の①～④の区分にもとづいていえば、「ような」と「ように」の交替がおこりうる

のは、①比況、③例示、④一致の三つの用法である。以下の例の「ような」を「ように」に、「ように」を「ような」におきかえても意味に変化は生じない。

①比況の用法

- (1) また或る草は蛇苺のような赤い小粒をつけ、トマトの味と匂いがあった。(野火)
- (2) 彼はボーイをつかまえて番茶のように薄いハイボールの文句をいった。(世界の終わり)

③例示の用法

- (3) お前のような立派なインテリが、どうしてそんな残酷なことをしたんだ。(青春の蹉跎)
- (4) 「浩助のように意志の強い子が、なぜあんなことを仕出かしたか、…」(冬の旅)

④一致の用法

- (5) 藍子は、次のような恐ろしい、あまりに恐ろしい言葉をたしかに両の耳に聞いた(楡家)
- (6) …部落解放全国委員会は…、次のように痛烈な批判を行っている。(『破戒』解説)

②「推定」で、「ような」と「ように」の交替はおこらない。次の例(7)(8)の名詞句「倉庫のような大きな建物」「羽二重のようなまっしろな生地」では、「推定」と「比況」の両方の解釈が成り立つが、「ような」を「ように」におきかえると、「倉庫のように大きな建物」「羽二重のようにまっしろな生地」となって、「比況」の解釈しか成り立たなくなる。

- (7) ばくと藤本は校正がすんだばかりのゲラが雨に濡れないように素早く背広の内側に隠し、  
近くにあった倉庫のような大きな建物の廊の下に逃げた。(新橋烏森口)

- (8) 羽二重のようなまっしろな生地のツイピースを皺ひとつなく…(青春の蹉跎)

ところで、先に指摘したように、「一致」は「例示」の下位用法であるから、「ような」と「ように」の交替がおこりうるのは「比況」「例示」の場合であるといえる。

本稿では、まず、「比況」「例示」の順に交替可能性の条件を詳しく検討し、次に、二つの場合の共通点と相違点を考えてみる。

なお、考察は稿末に掲げた資料から収集した用例をもとにしている。資料の偏りによる影響は、今後、必要に応じて修正したい。

## 1. 比況用法の場合<sup>3</sup>

### 1.1 N2がうける連体修飾「Xな」のタイプ

ここで、N2がうけるもう一つの連体修飾句を「Xな」で表すと、考察の対象となっているのは名詞句「N1のようなXなN2」である、と定式化できる。この「Xな」を、属性、動き、関係先<sup>4</sup>と分類してみると、次に示すように、「N1のような」が比況をあらわす場合に交替可能であるのは、属性の場合だけであることが観察される。

(属性)    お城のような大きい家                      /                      お城のように大きい家

(動き) \*馬のような走っている犬      /      馬のように走っている犬

(関係先) 池のような運動場の水たまり      /      \*池のように運動場の水たまり

そこで、ひとまず「Xな」が属性の場合に限って考察をすることとする。以下のように「N 1 のような」と「Xな」がN 2を修飾するしかたには、二つのタイプが区別される。それぞれの場合を順に検討したい。

### 1. 1. 1 N 1 とN 2に共通の属性Xがある場合

(9) 華車な骨に石鹼玉のような薄い羽根を張った、身体の小さい昆虫に、… (檸檬)

(10) 濁った血のような紅いグローブが内藤の両手にはめられる。(一瞬の夏)

例(9)では、「石鹼玉」と「羽根」のあいだに「薄い」という共通の属性が、例(10)では「濁った血」と「グローブ」のあいだに「紅い」という共通の属性がある。この場合には、「石鹼玉のような」「濁った血のような」が、形式的に「(薄い)羽根」「(紅い)グローブ」を修飾するが、意味上、「薄い羽根」「紅いグローブ」を修飾する。属性「薄い」「紅い」だけを修飾する「ように」の形の修飾句を用いた表現、「石鹼玉のように薄い羽根」「濁った血のように紅いグローブ」と意味のうえで違いがなくなる所以である。

かくして、N 1 とN 2に共通の属性Xがあり、「N 1 のような」が、属性XをもったN 2、すなわち「XなN 2」全体を修飾している場合には、「ような」と「ように」の交替が可能であるといえる。

当然のことながら、「ように」を用いた次の例(11)(12)でも同様のことが確かめられる。「N 1 のように」は、文法的・意味的には、それぞれすぐ後の属性を表す部分「Xな」だけを修飾しているが、N 2がN 1と共通の属性「Xな」をもっているため、「ような」におきかえても名詞句が表す意味内容に変化はおこらない。

(11) グラス・ジョー、つまりガラスのようにもろい顎を持ったボクサーに、… (一瞬の夏)

(12) 「飯は…出してくれる。ご飯と言えば、生卵と紙のように薄い塩鮭もつく (太郎物語)

以下、「Xな」がN 1 とN 2の共通の属性である例をあげる。いずれの場合も交替可能であることが確認される。((13)～(16)は「ような」の例、(17)～(20)は「ように」の例)

(13) 地上には雨が降っていた。針のような細かい雨だが、…。(世界の終わり)

(14) クサキ長官は…ヒッピー族の親玉のようなへんてこりんな男とあって (ブンとフン)

(15) 木立は朝露に…、枝のあいだにはまだ真綿のような白い霧がかかって (ビルマの堅琴)

(16) 門番は樹木の根のようなごつごつとした指で刃物の列を指さした。(世界の終わり)

(17) 朝から霧のように細い雨が降る日でした。(沈黙)

(18) 信子は丸太のように太い腕で、ぐいぐいとアイロンを台の上で滑らせ (太郎物語)

(19) しかし彼は子供のように単純な役人が、言い負かされると…。(沈黙)

(20) …といい…といい、ほとんど人形の面のように表情のない顔をしていることは (沈黙)

### 1.1.2 「N1のような」と「Xな」が並列してN2を修飾する場合

(21) (鸚哥は) …堅い嘴をカツカツとうちならして、黒い消しゴムのようにつめたい舌をだして、隊長の手をつきました。(ビルマの堅琴)

「黒い消しゴム」には一般に「つめたい」という属性はなく、「黒い消しゴムのような」と「つめたい」は「舌」の属性の二つの面を別々に表している。ここでは、文法的・意味的に、二つの形式「N1のような」で示される属性と、「Xな」で示される属性が、並列して後の名詞「N2」を修飾している。

この場合には、「ような」と「ように」の交替がおこらない。交替すると例(21)は「黒い消しゴムのようにつめたい舌」となって意味が破綻する。次の2例についても同様である。

(22) …そのおじいさんが小母さんが、小柄な、本当に対のような小柄な姿を見せ (楡家)

(23) ある年のこの行事(=京都の大文字焼きを模した行事)に…その年は大の字の下部があらかた消えてしまったのに、その上方へと蛇のような新たな火の筋がのびて (楡家)

## 1.2 「N1のような」の機能

以上をまとめると、名詞句「N1のようなXなN2」の比況用法において、「ような」と「ように」の交替が可能であるのは、XがN1とN2の共通属性である場合である。比況という認知のプロセスの如何についてはおくとして、語順に即していえば、ここにみられるのは「一般概念N1→属性X→個別N2」という構造である<sup>5</sup>。この点は「ように」の場合も同じである。

「お城のような」→「大きい」→家

「お城のように→大きい」→家

「N1のような」は属性Xをひきたてる一般概念N1を提示するものである。いわばその結果としてN1とN2は共通属性Xをもつことになる。

### 1.3 連体修飾句「Xな」の形式

1.1と1.2では交替可能性について、名詞句内の連体修飾句を意味的な観点からみてきた。そして、N1とN2に共通の属性Xがあり、「N1のような」が、属性XをもったN2、すなわち「XなN2」全体を修飾している場合には、「ような」と「ように」の交替が可能であることがわかった。

ところで、共通属性Xは典型的に形容詞で表されるが、次のように、Xが動詞由来の場合と名詞由来の場合もある。

#### 1.3.1 動詞由来の場合

##### 1.3.1.1 交替可能な場合

例(16)の「ごつごつとした指」、例(20)の「表情のない顔」のような、連体修飾句「Xな」に、

形容詞化した動詞の連体過去形（タ形）や否定形がくる場合にも、交替がおこる。次の例(24)～(29)も同様である。(24)～(26)は「ような」の例、(27)～(29)は「ように」の例)

- (24) ビルマ僧は面のようなこりかたまった顔をして、… (ビルマの豎琴)
- (25) …三秒後には金太郎のようなまるまるふとった赤ちゃんにも化け、… (ブンとブン)
- (26) まだ若木のような、けがれを知らぬ人たちが、家を離れ… (ビルマの豎琴)
- (27) …箒のように粗らにささくれたその口髭。(楡家)
- (28) 和服の裾がはだけ、棒のように痩せてよごれた素足が見え… (沈黙)
- (29) その塑像のように動かない顔が、…小説の女主人公のように錯覚された (若き数学者)

上記のような例では、連体動詞句が表すことがらが、N 1 と N 2 の共通の属性を表し、形容詞相当のはたらきをしている。なお、次のように、動詞のル形であっても属性の意味を表す場合は、交替可能である。

- (30) (踊り手たちの)ギリシャ神殿の円柱のような白く輝く脚が、現れては (風に吹かれて)
- (31) 白や、薔薇色や、薄紫の、紗のように透き通るそれらの衣に包まれた… (痴人の愛)

### 1. 3. 1. 2 交替不可能な場合

しかし、「Xな」が動詞由来の場合、その動詞の補語に相当するものがN 1 の前におかれることがある。その場合には交替不可能となり、「ように」だけが用いられる。次の例の「ように」を「ような」におきかえることはできない。

- (32) レイテ島北部の地勢は、…西へ耳のように張り出した半島から成立っている。(野火)

ただし、連体修飾句にある動詞「張り出した」の補語「西へ」が、動詞とともに連体修飾句内にある場合は、「耳のような／ように西へ張り出した半島」となり、交替可能である。

ちなみに、連体動詞句で表される修飾句「Xな」が属性ではなく動きを表す場合、すなわち動詞が本来の動詞性において用いられる場合には、「ように」だけが文法的に正しい。

- (33) …むかでの大群のように南下していったトルコ艦隊が、…。(コンスタンティノープル)
- (34) ずるい獣のように、吸いつく砂。(砂の女)
- (35) この天蓋のように覆いかぶさって来る現実の悪の方が、…。(草の花)<sup>6</sup>

このような場合のN 1 は、もはや連体修飾句が表す属性のもちぬしではない。「N 1 がそうするように」という意味で、様態の面から連体動詞句が表す動きを修飾している。ここでは「N 1 のように」が様態副詞的になっている。

### 1. 3. 2 名詞由来の場合

次の例のように意味的に形容詞性が強い(=属性を表す)場合は、交替可能である。

- (36) 妻が、…、これも天使のような可愛いさかりの子供のいる妻が (エディプスの恋人)
- (37) 丁度、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。(羅生門)
- (38) 彼女が手にしたライトが…高い壁に折れ線グラフのようなぎざぎざの模様を描いた。



(世界の終わり)

一般に、名詞は属性ではなく、人やモノを表している。だから、例(39)～(41)のように、名詞由来の「Xな」は、N1とN2の共通の属性を表さず、関係先などを表すことが多い。収集した実例でみると、名詞由来の修飾句のほとんどの場合は交替不可能であった。

(39) 闇のなかで聞こえたあの暗い太鼓のような波の音。(沈黙)

(40) 清高は……、小さい点のような眼下のゴンドラを見ては笑い、(錦繡)

(41) …ぼくはふみつぶされた鳥籠のようなコーヒー店のドアを破って… (聖少女)

しかし、収集資料には例(36)～(38)しか見いだせなかったが、「老人のような／ように 白髪の男」「桃のような／ように ピンク色の頬」など、Xが名詞で表されているにもかかわらず交替可能な例をつくることができる<sup>7</sup>。

#### 1.4 「Xな」とN1およびN2の意味的關係

以上に加えて、「ような」と「ように」の交替には、連体修飾句「Xな」とN1およびN2の意味関係によって制約が課せられる。

##### 1.4.1 交替可能な場合

これまでみてきた例で、交替がおこっている場合は、N1とN2が、連体修飾句が表す属性「Xな」のもちぬし(=主体)であった。

しかし、次のように、N1とN2が「もちぬし」と「もちもの」あるいは「全体」と「部分」の関係などにあって、N1が換喩的に用いられることがある<sup>8</sup>。このような場合にも、その換喩的な意味が属性Xの主体を表しており、交替可能である。((42)～(44)は「ような」の例、(45)～(47)は「ように」の例)

(42) 客人は二人とも兎のような赤い目で僕をじっと見て、…。(黒い雨)

(43) 原島久三は…風貌とはまるで一致しない鳥のようなカン高い声を出した(新橋烏森口)

(44) 台地…、テーブルのようなつるりとした平面がどこまでもつづいて…(世界の終わり)

(45) 監督の男がいて…鷹のように鋭い目つきで、客のみならずディーラーに(若き数学者)

(46) 夏の太陽の下のイタリア男みたいに愉快で図々しい男だった。色は白く、女のようにもりあがった胸には黒い毛が密生していた。(聖少女)

(47) 店の中も妙なつくりで倉庫のようにぞんざいなコンクリートの床の上に(新橋烏森口)

##### 1.4.2 交替不可能な場合

次の例(48)(49)では、N2である「高速道路」「摺縁」が、連体修飾句の動詞が表す動き、「張りめぐらす」「拭く」の主体ではなく対象になっている。このような場合は交替不可能である。

(48) 超高層ビル街、網目のように張りめぐらされた高速道路…(若き数学者)

(49) 上って見ると鏡のように拭いた摺縁は歩くと足の下がぎしぎし鳴る位だ、(野菊の墓)



この場合、上の例のように、「N 1 のように」は修飾部の動詞が表す動作の結果を比喩的に表し、結果副詞的になっていることが多い。

また、次の例(50)(51)のように、N 2 が主体の場合でも、N 1 が、連体修飾句の動詞が表す動きの結果を、比喩的に表す場合には、交替不可能である。

(50) …屏風のように立ち並んだ櫨の木へ鉛色の椋鳥が何百羽と知れず下りた頃から（檸檬）

(51) 門のように迫った両側の丘の林相も、…（野火）

ただし、連体修飾句の動詞がすでに結果を表す副詞をとまうときがある。その場合には、その結果副詞が表す属性を、N 1 と N 2 の双方がもっていると解釈できる。そのため、N 2 が対象の関係にあっても交替が可能になる。例(52)では連体修飾句に結果副詞「きつく」があるため、交替可能と思われる。

(52) 濡らした手拭で荒拭きしたあとを、こんどは木片れのようにきつくしぼったやつで、まるでガラスの曇りをおとすようなこすり方をする。（砂の女）

収集資料には、例(52)しかなかったが、「墨のような／ように黒く焼いたさかな」「氷のような／ように冷たく冷やした枕」など、交替可能な例をつくることができる。

## 1. 5. まとめ

名詞句「N 1 のような X な N 2」において、「ような」と「ように」の交替が可能であるのは、原則として、N 1 と N 2 がそれぞれ共通の属性 X の主体であって、「N 1 のような」が「属性 X をもった N 2」全体を修飾している場合である。ただし、正確には、名詞句「N 1 のような X な N 2」において、「N 1 のような」が比況用法である場合、その句は、一般概念 N 1 ののもつ属性 X を、個別の N 2 に帰属させて表そうとしているのであり、結果的に「X」が N 1 と N 2 の共通属性として表現されているというべきであろう。

共通属性 X は、典型的には形容詞によって表されるが、属性的な意味をもった動詞述語句や「名詞＋の」の形式によって表されることもある。

なお、N 1 そのものではなく、N 1 の換喩的な意味が共通属性 X の主体となって、この交替可能性を成り立たせている場合もある。

## 2. 例示用法の場合

### 2. 1 連体修飾句「X な」のタイプ

(53) お前のような立派なインテリが、どうしてそんな残酷なことをしたんだ（青春の蹉跎）

(54) 「浩助のように意志の強い子が、なぜあんなことを仕出かしたか、…」（冬の旅）

名詞句「おまえのような立派なインテリ」と「浩助のように意志の強い子」のそれぞれの「よ

うな」と「ように」をおきかえても、名詞句全体が表す意味内容は同じである。

比況の場合と同様、例示用法も「N 1 のような N 2」の N 2 が、さらに連体修飾をうけて用いられるとき、「ような」と「ように」の交替可能性が生じる。N 2 がうけるもう一つの連体修飾句を「X な」で表すと、考察の対象となっているのは名詞句「N 1 のような/ように X な N 2」である、と定式化できる。

### 2. 1. 1 「X な」が N 2 の内容を明示している場合

しかし、「X な」について交替可能性の条件をみれば、比況の場合と事情はちがっている。

先の例 (53) (54) において、「立派な」「意志の強い」は「お前」「浩助」の属する集合体「インテリ」「子」をより詳しく説明している。比況では、交替がおこるのは「X な」が N 1 と N 2 の共通属性を表してる場合であった。これに対して、例示において交替可能な場合の「X な」は、N 1 が要素として属する集合体 N 2 の内容を明示する機能をはたしている。

以下の例でも「ような」と「ように」のおきかえが可能である。((55)～(57)は「ような」の例、(58)～(60)は「ように」の例)

(55) 彼女のようなほっそりとした美人がそんなにガツガツと食事するのを (世界の終わり)

(56) コロラド大学のような大きな大学のフットボール選手は、… (若き数学者)

(57) 私たちのような幸福な夫婦が、どうして別れてしまわなければならぬ事態に… (錦繡)

(58) 相手は太郎のように、金がないチンピラとも思えない。(太郎物語)

(59) 崔自身も、自分のように強情な男を韓国ではオーキというのだ、と… (一瞬の夏)

(60) …自分のように汚れきった人間が彼女と結婚できる筈などないと (エディプスの恋人)

そこで、その N 2 の内容を明示する「X な」の連体修飾をうけた N 2 を **N 2** と表記することにしよう。

おまえのようなインテリ → おまえのような立派なインテリ

N 1                  N 2                  N 1                  **N 2**

### 2. 1. 2 「N 1 のような」と「X な」が並列して N 2 を修飾する場合

これとは異なり、次の例のように「N 1 のような」と「X な」が並列して用いられることがある。「N 1 のような」と「X な」が N 2 に対等にかかっていて、「X な N 2」が **N 2** を形成しない場合、「ように」との交替はおこらない。

(61) 「ほんと、あたしのようなこんな婆あでも、口惜しゅうて口惜しゅうて…」 (黒い雨)

## 2. 2. 「N 1 のような」の機能<sup>9</sup>

ここで「X な」の存在を前提とせず、例示用法における「N 1 のような」の機能についてみてみよう。

同じ形をとっていても「N 1 のような N 2」の形式の中には、(62) (63) のように「N 1 のよ

うな」という連体修飾をうけなくてもN2が文の他の成分との意味関係を変えない場合と、(64)(65)のように、「N1のような」という連体修飾をうけなければ文の他の成分との意味関係を変えてしまう場合がある。

(62)「俺は、君たちのような秀才ではないし、…前途が多難だよ。…」(冬の旅)

(63)もしも伯父のようなかね持ちならば、…問題を解決することもできる (青春の蹉跎)

(64)「それに、いまの世の中では、きみらのような夫婦は、なかなかいないと思うな。…」  
(≠夫婦) (冬の旅)

(65)一度倒産した会社を立て直すのに、夫のような社員はむしろ邪魔になるに違いないと智子は思った。  
(≠社員) (女社長に乾杯！)

例(62)で「俺は秀才ではないし……」、(63)で「もしもかね持ちならば……」となっても、「俺」と「秀才である」、「(ある人)」と「かね持ちである」の意味関係に変化はないが、(64)「夫婦はなかなかいない」、(65)「社員はむしろ邪魔になる」は、もとの文と異なった意味を表す。つまり、前者では連帯修飾句「N1のような」が必須要素ではないのに対して、後者では必須要素となっている。

金水(1986)では、前者の、必須要素ではない連体修飾成分の機能を「情報付加 (非限定)」、後者の、必須要素となる連体修飾成分の機能を「限定」として区別している。

(情報付加の例) すぐにかつとなる彼の性格は昔のまま変わらない。(金水1986: 606)

(限定の例) 人のために尽くす心が大切だ。(金水1986: 606)

ちなみに、「限定とは、修飾される名詞の表す集合を分割し、その真部分集合を作り出す働きをさす」(金水1986: 606)とも指摘されている。

## 2.2.1 「N1のような」が必須要素でない場合

さて、「N1のような」が必須要素となっていない場合の名詞句においては、「N1のような」には、(a)N1がそれに属するタイプのN2であるという意味でN2を修飾しながら、(b)属性N2をもつものとしてN1を例示する、という双方向のはたらきをとらえることができる。

たとえば、次の「君たちのような」は、一方で(a)「秀才」にもいろいろあるが、そのうちの「君たち」がそれに属するタイプの「秀才」である、という意味を与えながら、他方で(b)いわゆる「秀才」の例として「君たち」を示している。

(62)「俺は、君たちのような秀才ではないし、…前途が多難だよ。…」(冬の旅)

この、(a)と(b)の機能は先にあげた金水(1986)の「限定」と「情報付加」に対応する。つまり、(a)N1がそれに属するタイプのN2であるという意味でN2を修飾する場合、「N1のような」がなければその意味は実現不可能となるのに対し、(b)属性N2をもつものとしてN1を例示する場合には、「N1のような」は単にN2を補足しており、先の例で「君たちのような」を省略しても文意に大した変化はない。

(62') 「俺は、秀才ではないし、…前途が多難だよ。…」

つまり、「N1のようなN2」の名詞句において「N1のような」が必須とならないのは、「N1のような」を(b)「情報付加」の意味で読み取ることが可能であるから、ということになる<sup>10</sup>。以下、同様の例である。

(66) どのテーブルでも…お客の他に、何人かの私のような見物人が立って (若き数学者)

(67) 奥さんは始め私のような書生を宅へ置く積りではなかったらしいのです。何処かの役所へ勤める人が何かに座敷を貸す料簡で、… (こころ)

(68) 自分のような田舎者には結局田舎がてきしているのだ。(痴人の愛)

(69) なにか社会全体が、或る動揺を、落ち着かぬものを含んでいるような気がした。ホーフプロイのような大麦酒店も、めっきり客足が減っているようであった。(楡家)

## 2.2.2 「N1のような」が必須要素である場合

必須要素となっている「N1のような」には、先に指摘したはたらき、(a)「限定」と、(b)「情報付加」のうち、(a)「限定」のはたらきしか認められない。

(64) 「…いまの世の中では、きみらのような夫婦は、なかなかいないと思うな。(冬の旅)

たとえば、上の「きみらのような」は、(a)「夫婦」にもいろいろあるが、そのうちの「きみら」がそれに属しているタイプの「夫婦」(＝真部分集合)である、という意味で後ろの「夫婦」を修飾しているだけで、(b)いわゆる「夫婦」の例として「きみら」をあげているわけではない。以下、同様の例である。

(65) 一度倒産した会社を立て直すのに、夫のような社員はむしろ邪魔になるに違いない…  
(女社長に乾杯！)

(70) 「君らのような若者がいるかぎり日本は負けやせぬ。…」(楡家)

(71) 今夜のような晩、もし春さんが大阪にいたら、自分はきっと…。(あすなろ物語)

(72) 少年院では……比較的矯正のしやすい少年達のなかへ、利兵衛のような少年が入ってきたときに、逃亡事件がおきがちであった。(冬の旅)

(73) 「…学校時代にも、おまえ等のような友人はいなかったよ。…」(冬の旅)

ところで、次のようにN2が形式名詞や準体助詞である場合も、「N1のような」が必須要素となる場合にあたる。

(74) 「…もし西方の国々からこのパードレのようなお方が、まだまだ来られるなら (沈黙)

(75) (ビルマ人は) …たとえばわれわれのようなものが外から攻めこんできたときに…  
(ビルマの豎琴)

(76) 「私のようなのは子供が出来ないのかしらね」(雪国)

ひるがえって考えれば、N2が普通名詞である(64)(65)(70)～(73)のような場合も、連体修飾句「N1のような」が必須要素となっており、N2は相対的に形式名詞化しているといえそ

うである。

N 2が形式名詞化しているこれらの例示用法では、N 2の本来の意味が希薄化するのにもともない、連体修飾句「N 1のような」の意味が前面に押しだされる。当然のことながら「N 1のような」には(a)「限定」のはたらきしか認められない。

### 2. 2. 3 N 2の形式名詞化と婉曲用法

そして、N 1の前面化とN 2の意味の背景化が一定の閾をこえて進むと、「N 1のような」が例示の機能をはたすのではなく、「N 1のようなN 2」全体としてN 1そのものを意味するようになる<sup>11</sup>。言うまでもなくここでは「N 1のような」は限定のはたらきをしているが、それによってつくられる真部分集合の要素はN 1のみとなっている。

次の例(77)「あなたのような人」、(78)「安のような男」は、それぞれ「あなたとタイプを同じくする人」「安とタイプを同じくする男」を意味して「人」「男」を修飾するのではなく、「あなた」「安」を婉曲に指し示している。

(77)「どうしてあなたのような人が、ボクシングのマッチメイクなんかしているのですか？」

[≒どうしてあなたが…](一瞬の夏)

(78)私は少年院で安のような男と知りあい、彼を友とすることができました。

[≒私は少年院で安と知りあい…](冬の旅)

この言いまわしには、N 1に何らかの評価がともなっている場合がある。たとえば、次の例(79)では、N 1への尊敬の感情的な意味がさらに強められている。反対に、例(80)からは、N 1への低い評価を表す軽蔑の感情的な意味が、また、N 1が一人称の場合の例(81)からは、同じく低い評価を表す謙遜あるいは卑下の感情的な意味が読みとれる。

(79)せめて病院で、あなたさまのような方と親しくなさいましたが、あの方の心の慰めとなったかと思われます。[≒あなたさまと親しくなさいましたが…](草の花)

(80)お前のような人間に珠子を愛する資格があると思うのか。(エディプスの恋人)

[≒お前に珠子を愛する資格が…]

(81)「名前というのは、そいつの一生に関係があるだろう。俺のような父親がつけた名では、子供に悪い気がするなあ。…」

[≒俺がつけた名では…](冬の旅)

### 2. 2. 4 「N 1のようなN 2」における「N 1のような」の機能

N 2が形式名詞であっても、N 2が「Xな」によって内容を明示され、N 2として実質名詞化されると「N 1のような」が必ずしも必須要素とはいえない場合もでてくる。

(82)「…きみのような意志の強い者が、なぜこんなことを仕出しかしたのか」(冬の旅)

(83)「…わたくしのような平凡な女が、もしあの方と一緒になれば、…。(草の花)

(84)「…おまえのような根性のくさった奴は日本人ではない。」(ビルマの豎琴)

(85)「…ベンツなんて、俺達のような若いもんが乗りまわす車じゃないんだ。…」(冬の旅)

(86) 日本のような単一民族に近い国では考えられない種々様々の複雑さが… (若き数学者)

例(84)(85)(86)では解釈によって「N1のような」が必須要素ではない。2.2.1でみたように、必須要素ではない「N1のような」によって表される連体修飾句には、(a) (限定) N1がそれに属するタイプ (=真部分集合) のN2であるという意味でN2を修飾しながら、(b) (情報付加) 属性N2をもつものとしてN1を例示する、というはたらきがある。

## 2.3 連体修飾句「Xな」の形式

さて、比況用法の場合、「ような」と「ように」の交替が可能であるのは、「Xな」がN1とN2の共通属性を表している場合であり、「Xな」の多くが形容詞であった。また、形容詞的な意味を表す動詞や「名詞+の」である場合もあった。例示の場合もまた、「Xな」は形容詞や形容詞的な意味の動詞が用いられる。(先の例((53)～(60)、(82)～(86)を参照。)

ところが、例示では「Xな」が動詞述語句であることも多い。また、少数ではあるが、名詞由来の場合もあるので、順にみていくことにする。

### 2.3.1 動詞述語句である場合

「ような」と「ように」が交替可能な例示用法において、連体修飾句「Xな」に動詞述語句が用いられるのは、相対的に「ように」であることが多い。

#### 2.3.1.1 交替可能な場合

(87)(88)は「ような」の例、(89)～(93)は「ように」の例である。

(87) きっと誰も来てはくれまい、自分たちのような、みんなから軽視され、無視されている夫婦、この桃子と四朗のところへなぞは誰も来てはくれまい。(楡家)

(88) 自分のような、いやらしくおどおどして、ひとの顔いろばかり伺い、人を信じる能力が、ひび割れてしまっているものにとって、ヨシ子の無垢の信頼心は、…。(人間失格)

(89) …母の信子のように内職をする女などというのは、何となくうさんくさく (太郎物語)

(90) …、黒のようにかあっとする奴は、実際には悪いことはしていない。(冬の旅)

(91) 時どき、先程の老人のようにやって来ては涼をいれ、景色を眺めてはまた立ってゆく人があった。(檸檬)

(92) ぼくのように現在のなかでだけ生きている人間には…この時刻は耐えがたい (聖少女)

(93) セミナーとひとくちに言っても実際は多種多様で、ルイス教授主宰のもののように自分の研究結果を発表することが主となるものの他に、…。(若き数学者)

例(87)(88)と、(89)～(93)の「ように」を「ような」におきかえた例では、連体修飾句「N1のような」は、必須要素であり(a) (限定) だけのはたらきをする場合と、必須要素ではなく(a) 「限定」と(b) 「情報付加」の両方のはたらきをする場合の、どちらにも解釈できる。

しかし、「ような」と「ように」の交替可能な名詞句において、Xとして用いられている句



の述語にテンスがある場合がある。

(94) 彼等の中にはジル・デ・ラ・マッタ師のように日本を目前に見ながら、難破した船と運命を共にされた方たちも多くいられます。 (沈黙)

(95) 実際、カールのように徹底的に予習したうえ、一人一人の宿題を懇切丁寧に添削して返していたりしたにもかかわらず、なぜか学生には好かれず、さんざんな目に会ったのもいれば、私のように、それほどの予習もせず、宿題の採点もうんざりしながらやっていたのに、学生からは圧倒的に好感を持たれて、この教授評価ではほとんど常に、数学教室のトップであった人間もいるのだから。 (若き数学者)

(96) 君等のように講習を済まして来た人か、勝野君のように検定試験から入って来た人か、または吾儕のように師範出か――これより外には無い。 (破戒)

(97) 内藤のように長くアウト・ボクシングをしてきた者に、パンチ・ドランカーは少ないはずだった。 (一瞬の夏)

(98) …たとえば安のように働いていた少年が入ってきた場合、少年院では…。 (冬の旅)

この場合、「N1」がそのできごとのアクチュアルな参加者を表していて、N2の一要素であることが明確である。つまり、この場合の「N1のような(ように)」のはたらきは(b)「情報付加」だけである。先の例(94)～(98)の「ように」はすべて「ような」におきかえられ、「N1のような」は(b)「情報付加」に解釈される。

### 2.3.1.2 交替不可能な場合

「Xな」が動詞述語句であり、「ように」のみが用いられる場合がある。

(99) 土門拳のように室生寺を訪れた人は珍しい。 (作例)

(注：土門拳は足繁く室生寺を訪れて仏像を撮った写真家として著名)

この例では、「ように」は「ような」におきかえられない。「土門拳のように」は動詞述語句「Xな」の動作「訪れた」をその様態の意味で修飾している。

このように、いわゆる、様態副詞的に用いられた「N1のように」は交替不可能である。

### 2.3.1.3 「N1のように」の機能

以上みてきた「N1のように」と交替可能性の関係について整理してみよう。

(97) 内藤のように長くアウト・ボクシングをしてきた者に、パンチ・ドランカーは少ないはずだった。 (一瞬の夏)

(99) 土門拳のように室生寺を訪れた人も珍しい。 (作例)

「Xな」が動詞述語句の場合には、それが、N2の内容を明示する働きをしている場合と、「N1のように」で表される様態副詞の被修飾用言として働いている場合が区別される。

前者の場合、「Xな」が「N1のように」の非修飾用言であることから意味的に解放されており、したがって、「N1のように」も本来の連用修飾の機能をはたしていない状態にある。



このような場合に、「ような」との交替が可能となっていることがわかる。

内藤のように「長くアウト・ボクシングをしてきた→者」

「土門拳のように室生寺を訪れた」→人

交替可能な場合の「N 1 のように」は、連用の形式をしているものの、連用の機能ははたしていない。例示用法とは、個別のN 1 を、集合「X なで内容を明示した一般概念N 2」に帰属させることである。「N 1 のように」が連用形であるにもかかわらず、連体的に用いられる所以である。

「N 1 のように (= ような)」 $\subset$ 「X なN 2」

「X な」が動詞述語句以外の場合についても、例示における「N 1 のように」は、連用修飾機能をはたしていない状態にあることが推察される。

### 2.3.2 名詞由来の場合

「X な」が名詞由来の場合、(100)のように名詞述語句である場合は交替可能である。

(100)「僕等のように芸術家でない人間にとって、人生は…」(草の花)

あるいは、次のように「名詞+の」の形でN 2 を修飾する場合にも、「N 1 = X」が成立する場合に「ような」「ように」の交替が可能である。((101)(102)は「ような」の例、(103)～(105)は「ように」の例)

(101)…、結婚という所有の形式は、未紀のような高級種の女を所有する場合、…(聖少女)

(102)「…、生理となれば私のような高卒の者は危ないと思うんです。…」(女社長に乾杯！)

(103)彼のように稀にみる、しかも働き盛りの天才は、研究に専念すること…(若き数学者)

(104)自分のように、ただ、(涙が)とめどなく流れるたちの男では無かった…(人間失格)

(105)「先生のように三十と五十のあいだのおじさま族って、大きい。…」(聖少女)

上の例ではそれぞれ、「未紀＝高級種」「私＝高卒」「彼＝働き盛り」「自分＝ただ(涙が)とめどなく流れるたち」「先生＝三十と五十のあいだ」となっている。

しかし、次の例では「N 1 = X」とはなっておらず(「綾取りやお手玉≠少女」)交替不可能である。

(106)待童のように唯々諾々と、綾取りやお手玉のような少女の遊びをやった。(楡家)

### 2.3.3 N 2 が N 2 の場合

次のように、N 2 がN 2 の内容的な意味「X な」を含んでいる(= N 2)場合には、「ような」「ように」の交替が可能である。

(107)…講習を済まして来た人か…または吾儕のように師範出か—これより外には無い(破戒)

資料には(107)の例しかなかったが、「太郎のような/ようにインテリ」「花子のような/ように美人」など、交替可能な例をつくることができる。

## 2.4 N1およびN2の意味関係

これまでみてきた例で交替がおこっている場合は、N1とN2が、後述の述語に対して同じ格関係にある場合であった。

しかし、典型的な場合だけではなく、次のように、N1とN2が「もちぬし」と「もちもの」あるいは「全体」と「部分」の関係などにあって、N1が換喩的に用いられ、その換喩的な意味が後述の述語に対してN2と同じ格関係をもっている場合にも交替可能である。((108)～(110)は「ような」の例、(111)～(113)は「ように」の例)

(108) その指輪は、内藤のような太い指でなければとうていはめられない代物 (一瞬の夏)

(109) 「ここにあなたのような若々しいフレッシュな頭脳を持ってくる。(女社長に乾杯!)

(110) …、さすがは女優だけあってナオミのようなガサツな所がありません。(痴人の愛)

(111) 彼は亡父のように自ら図面をひくような才は持たず、すべて他人まかせ… (楡家)

(112) (村田先生は) 他の医者のように取っつきにくいところがなく、温厚で… (草の花)

(113) 会社では、学生時代のように気楽な服装はできなかった。(冬の旅)

## 2.5 まとめ

名詞句「N1のようなXなN2」において、N2が「Xな」によって内容を明示されている場合に、交替が可能である。この「Xな」は形容詞だけでなく、動詞述語句によっても表現される。また、N1の属性を表す名詞述語句や「名詞+の」の形によっても表される。

交替可能な「N1のような/ようにXなN2」において、「N1」は集合N2の一要素を表し、「N1のような/ように」はN2を情報付加的に修飾している。そしてこの場合の「N1のように」は本来の連用修飾の機能から解放されている。

なお、N1とN2は後述の述語に対して同じ格関係にたつ。ただし、N1が換喩的に用いられ、その換喩的な意味とN2とが、後述の述語に対して同じ格関係にたつ場合もある。

## 3. 名詞句における「ような」と「ように」の交替について—まとめ

助動詞「ようだ」の連体形「ような」と連用形「ように」は、「N1のような/ようにXなN2」という名詞句の中で交替が可能な場合がある。それは「ような」と「ように」の用法のうち「比況」と「例示」の場合である。

交替がおこる場合の「Xな」の機能はそれぞれ異なる。「比況」の場合、「Xな」はN1とN2の共通属性を表し、形容詞によって典型的に表される。「例示」の場合、「Xな」はN2の内容を明示する機能をはたし、形容詞だけではなく動詞述語句によっても表される。

それぞれの用法において交替を可能ならしめるのは、「ような」「ように」の連体修飾・連用

修飾の機能からの解放である。しかし、そのありようは異なる。

「比況」の場合には、「N 1 のような」にそなわる属性「X」を取り出し、それをN 2 に帰属させる点、「N 1 のような」が連用的になっているといえる。

「例示」の場合には、「N 1 のように」が、N 2 の内容を明示する「Xな」を連用修飾するのではなく、単に「N 2」の一例を表している（＝「N 1 のような」）点、連体的になっているといえる。

## 注

- 1 形式が異なれば必ず意味も異なる。こうした観点からの厳密な意味の差異についての議論には本稿では立ち入らない。
- 2 国立国語研究所(1951)、永野(1969)、川口(1984)、森山(1995)を参考。
- 3 本節は光信(2012)に加筆・修正を施したものである。
- 4 関係先とは「名詞＋の」が表す意味関係の一つである。高橋太郎ほか(2005)を参照。
- 5 ここでいう一般概念とは、(個別の指示対象を指すのではなく)聞き手あるいは読み手との間で、共通認識が成り立っていると想定されるものごとを指している。比況とは、つまるところ、既知の一般概念によって対象とする個物を説明することである。
- 6 この例は、Xについて「N 1 の属性」と「N 1 の動き」のどちらの解釈も可能であり、「ような」と「ように」の交替可能という点で境界例といえる。
- 7 このように、資料中にほとんど見いだされない交替可能な例を作成できるケースについては、資料の偏りに因るものであるのかどうか、文体的特徴という観点も含め今後の考察課題としたい。同様のケースは本稿 1. 4. 2 と 2. 3. 3 にもある。
- 8 この関係にある「N 1 のようなN 2」の意味構造の考察は渡邊(2000)に詳しい。
- 9 本節は 2. 2. 4 を除いて、光信(2008)の 1 節と 2 節に加筆・修正を施したものである。金水(1986)に指摘の点を引用した考察は加筆による。
- 10 「N 1 のような」を省略して意味が変わらないのは(b)「情報付加」のみのはたらきによるものである。
- 11 この用法については、倉持(1982)で「例示的に取り上げた事柄自体に言及しようとしている」、高橋(1995)で「修飾成分として提示する要素について述べるのが主眼」などと指摘されている。

## 参考文献

- 奥津敬一郎(2007)『連体即連用?』ひつじ書房
- 川口順二(1984)「ソナナ+Nについて―西対照―」『芸文研究』第46号慶応義塾大学
- 金水敏(1986)『連体修飾成分の機能』松村明教授古希記念 国語研究論集 明治出版

- 倉持保男(1982)「ようだ」日本語教育学会編『日本語教育事典』大修館書店
- 国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞一用法と実例一』秀英出版
- 高橋太郎・金子尚一・齋美智子・金田章宏・鈴木泰・須田淳一・松本泰丈(2005)『日本語の文法』  
ひつじ書房
- 高橋美奈子(1995)「トイッタとノヨウナ」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(下)』  
くろしお出版
- 永野 賢(1969)「ようだ一比況<現代語>」松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社
- 光信仁美(2008)「「N 1 のような N 2」の例示用法」『立正大学国語国文』46号
- (2012)「名詞句における「ような」と「ように」の交替 一比況用法の場合一」  
『立正大学国語国文』50号
- 森山卓郎(1995)「推量・比喻比況・例示一「よう/みたい」の多義性をめぐって一」『日本語の研究 宮地  
裕・敦子先生古稀記念論集』明治書院
- 渡邊ゆかり(2000)「直喩を表す「体言句X + のような + 体言句Y」の意味特徴」『日本語教育』105号

### 考察対象の用例の出典

芥川龍之介『羅生門・鼻』(1917)/有島武郎『小さき者へ・生れ出づる悩み』(1916)/安部公房『砂の女』  
(1962)/赤川次郎『女社長に乾杯!』(1982)/石川達三『青春の蹉跎』(1968)/石川淳『焼跡のイエス・処  
女懐胎』(1946・1948)/井伏鱒二『黒い雨』(1966)/伊藤左千夫『野菊の墓』(1906)/井上靖『あすなろ物  
語』(1953)/井上ひさし『ブンとフン』(1970)/五木寛之『風に吹かれて』(1968)/遠藤周作『沈黙』(1966)/  
大岡昇平『野火』(1951)/大江健三郎『死者の奢り・飼育』(1957・1958)/川端康成『雪国』(1935)/梶井  
基次郎『檸檬』(1925)/開高健『パニック・裸の王様』(1957・1958)/北杜夫『楡家の人びと』(1964)/倉  
橋由美子『聖少女』(1965)/沢木耕太郎『一瞬の夏』(1981)/志賀直哉『小僧の神様・城の崎にて』(1920・  
1917)/島崎藤村『破戒』(1906)/椎名誠『新橋烏森口青春篇』(1987)/塩野七生『コンスタンティノーブル  
の陥落』(1983)/曾野綾子『太郎物語 大学編』(1976)/谷崎潤一郎『痴人の愛』(1924)/太宰治『人間失格』  
(1948)/竹山道雄『ビルマの豎琴』(1948)/立原正秋『冬の旅』(1969)/筒井康隆『エディプスの恋人』(1977)/  
夏目漱石『ころ』(1914)/福永武彦『草の花』(1954)/藤原正彦『若き数学者のアメリカ』(1978)/松本  
清張『点と線』(1958)/宮本輝『錦繡』(1982)/村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』  
(1985) [以上、『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』新潮社(1995)より]

(本文では紙幅の関係上、一部書名を省略して表記している場合がある。)

(みつのぶ・ひとみ 国際言語学部准教授)